



# 筑紫女学園大学リポジット

## Generic Nouns in Nominal Tautologies

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2014-02-17 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 緒方, 隆文, OGATA, Takafumi メールアドレス: 所属:
URL	<a href="https://chikushi-u.repo.nii.ac.jp/records/230">https://chikushi-u.repo.nii.ac.jp/records/230</a>

# 総称名詞からみたトートロジー

緒 方 隆 文

Generic Nouns in Nominal Tautologies

Takafumi OGATA

## 1. はじめに

A rule is a rule. のような英語のトートロジー、及び If he does it, he does it. のような英語のトートロジー的表現を中心に考察する。方法として、日本語のトートロジー分析 (緒方 2006a)、総称文分析 (緒方 2006b) を応用して論を進める。

まずトートロジーは強調表現の一種であり、カテゴリーの再確認・再定義をする構文と考える (cf. 緒方 2006a)。そのためカテゴリーを表す総称名詞が、トートロジーの主語 (属詞) にくると考える。英語の総称名詞は、a(n) + Nsg (単数不定名詞句) をはじめ 5 種類ある (固有名詞は後述)。本稿では総称名詞をもとに、トートロジー解釈を規定する。そしてトートロジー的表現もまた、条件文などいくつか表現形式がある。これも表現形式ごとにその解釈方法を見ていく。

分析の方法はトートロジーもトートロジー的表現も、背景化のプロセスを用いて説明する。背景化のプロセスとは、当該カテゴリーを規定するとき用いる方法で、対立するものを背景化することで当該カテゴリーの境界線を明確にするプロセスを指す。何を背景化するかで、内部背景化と外部背景化の 2 種類がある。

以下の構成は 2 節でトートロジー分析の流れをみて本稿の立場を述べる。3 節で日本語のトートロジー分析を見る。これは緒方 (2006a) を要約したもので、英語のトートロジー分析の前提となる。4 節で英語のトートロジーを、総称名詞ごとに分析する。5 節でトートロジー的表現を扱い、6 節をまとめとする。

## 2. Radical semantics 対 Radical pragmatics

トートロジー研究の中心的テーマの一つに、それが語用論的なのか意味論的なのかがある。前者の語用論的立場は、トートロジー解釈が文脈に応じて行われるという考えで、意味論より語用論に重点をおく (Grice 1975, Levinson 1983, Ward and Hirschberg 1991, etc.)。一方後者の意味論的立場は、トートロジー解釈が個別言語特有の形式によって導かれると、意味論的立場に重点を置く考えになる (Wierzbicka 1987, 1991)。そして折衷案的立場をとるものに、Fraser 1988, Gibbs and



(3) a. Boys will be boys.

b. Business is Business.

つまりどちらの立場も部分的には正しいのだが、全体像を見据えていないため、間違っていると  
いわざるを得ない。全体を見るにはまず 1 トートロジーが何かということ、 2 なぜ文脈  
依存度が変化するのかという間に答える必要がある。

1 の問に対し本稿では、トートロジーをカテゴリーの再定義構文と考える。そして再定義  
するプロセスとして、対比するものの背景化があるとみなす。対比するものを背景化することで、対  
比するものと当該カテゴリーの境界線が明確となり、再定義が可能になる。「~でないもの」が当  
該カテゴリーになるからである。この背景化にはパターンがいくつかあり(後述)、言語形式によっ  
てとるパターンが決まっている。そのため言語形式によって、トートロジーの意味解釈が変わって  
くることになる。Wierzbicka (1987) が述べるような言語形式による意味の違い、及び(1)の分  
布は、背景化のパターンの違いからすべて導かれると考える。

このとき二つめの問「なぜ文脈依存度が変化するのか」が問題になる。背景化のパターンだけで  
意味が決まるのであれば、文脈依存度は変化しないはずである。本稿では「背景化するもの」の決  
めやすさが、その理由と考える。背景化するには、背景化するものを決定しなければならない。例  
えば「子供は子供」(Kids are kids.) では、大人が対比されることはいわば固定化されている。そ  
のため文脈依存度は極めて低い<sup>注1</sup>。大人と違って、子供は子供であるという解釈になる。一方  
「風は風」(Wind is wind.) は、何を対比し背景化するかそのままでは分からない。例えば凧揚げ  
大会で風が弱いと嘆いている人に「風は風」といえば、たとえ弱い風であっても吹いていること  
には変わらない。風は弱くても風であって、凧をあげられるという意味になる。こうしたトートロ  
ジーは文脈なしでは独り立ちできず、文脈依存度がかなり大きい。このように対比するものの決定のし  
やすさが、文脈依存度の違いにつながっている<sup>注2</sup>。

トートロジーという表現がなぜ必要かという理由は、カテゴリーの境界が流動的だからである。  
流動的でゆるる境界線を仕切り直しする表現がトートロジーになる。カテゴリー認識は土台部分で  
ある。しかしこれが様々な要因によって、その境界線がゆるるため、仕切り直しが必要になって  
くる。

本稿ではカテゴリーの仕切り直し(再定義)を、背景化というプロセスで説明する。この背景化の  
パターンが、トートロジー解釈に方向付けを与え、最終的には何を背景化するかが決定され意味が  
確定すると主張する。以下具体的に見ていく。

### 3. 日本語のトートロジー

緒方(2006a)で日本語のトートロジーを主に取り上げ、(4)を考察した。

(4) a. トートロジーとは何か(どういう表現であるか)。

b. トートロジーはどのように意味を獲得するか（有意味化の手順）。

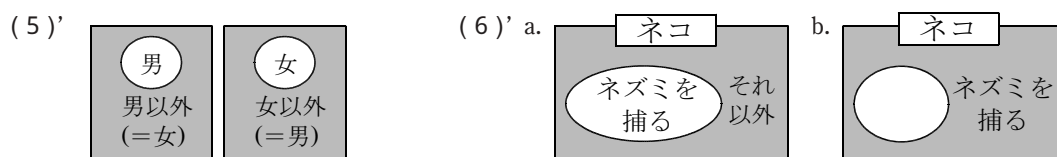
(4a) に対しトートロジーは、同一名詞を繰り返す強調構文の一種と考えた。他の強調表現と同じ原理で説明できるからである。その上でトートロジーはカテゴリーの再確認・再定義をする構文とした。つまりトートロジーの主語(属詞)がカテゴリーを表し、その再定義を行う構文がトートロジーなのである。(5) では「男」「女」が、(6) では「ネコ」がカテゴリーになっており、再定義作業が行われている((6) の例文は坂原 2002: 112-3, 124)。

(5) しょせん、男は男、女は女だ。

(6) a. ネズミを捕ってこそ、ネコはネコだ。      b. ネズミを捕らなくても、ネコはネコだ。

このとき再定義の方法は2つある。一つは「XはYでないもの」(他のものでないことを述べる方法)、もう一つは「Xはxという属性をもったもの」(中身に言及する方法)である。(5) は前者、(6) は後者の例になる。(5) の前半部分は、男は男であって、男以外のものではない。後半部分は、女は女であって、女以外のものではない、という意味である。つまり他のものでないことを強調することで、カテゴリーを再確認する。一方(6) では、ネコの属性が問題になっている。(6a) の場合ネズミを捕るネコに限定して、(6b) の場合ネズミを捕らないネコも含めて、ネコのカテゴリーを再定義している。

こうした再定義のプロセスを緒方(2006a)では「対比するものの背景化」によってとらえ直す。図示したものが(5)'(6)'になる。



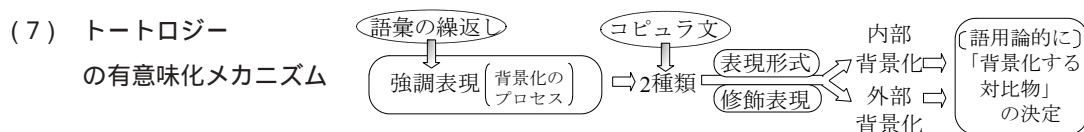
(5) では、各々対比する「男以外」「女以外」を背景化することで、[男] ないしは [女] を再確認する。一方(6a) では [ネズミを捕る以外の特性] を背景化し、基準を [ネズミを捕る] に限定し、カテゴリーの再定義を行う。(6b) では [ネズミを捕る] を背景化し、それを除外したネコのもので、ネコというカテゴリーを再定義する。

(5) のように [XはYでないもの] とする場合、いわば外部のYを対比し背景化するため、外部背景化と呼んだ。また(6) のように [Xはxという属性をもったもの] とする場合、いわば内部の特性(x以外)を対比し背景化するため、内部背景化と呼んだ。このときトートロジーは、外部背景化トートロジーと、内部背景化トートロジーの2つがあることになり、各々で解釈とふるまいが違うことを示した。この分析は、英語のトートロジーにもそのまま適用される。しかし日本語と英語は異なる要因がからむため、若干説明が異なるが、その本質部分は同じと考える(詳細は後述)。

一方(4b) に対しては6要因(背景化のプロセス、語彙の繰返し、コピュラ文、助詞、副詞、

表現形式、語用論的知識)により、トートロジーは有意味化するとした。まず出発点として、語の繰り返しがある。語が繰り返されることで、強調構文であることが分かり、「対比するものの背景化」のプロセスが適用される。次にコピュラ文という構造から、2つの背景化(内部背景化と外部背景化)の選択肢が生じる。というのも繫辞には、中に視点が向く場合と、外に視点が向く場合の2つがあるからである。そして助詞(「は」「が」「も」)、副詞(「やっぱり」「所詮」等)、及び表現形式によって、内部背景化か外部背景化かが決定される。最後に背景化する[対比物]が語用論的に決定され、意味が確定するとした。

しかしここでは英語にも適用できるよう若干修正する。(7)は緒方(2006a)で提示された図を修正したものである。



一つめの修正は、助詞と明記していたのを「表現形式」とした。英語には助詞はなく、代わりに英語では冠詞の付き方・単数/複数が関わってくるからである。二つめは副詞と記していたのを広げるため修飾表現とした。三つめは最後の「語用論的に」を( )でくくった。というのもトートロジーには固定表現があり、語用論的推論がなくとも意味が確定するものがあるからである。とはいえ緒方(2006a)で述べた基本的考え方は同じである。以下そのプロセスを英語トートロジーで見る。

#### 4. 英語のトートロジー、総称名詞による分析

前節で日本語のトートロジー分析について見た。本節ではその分析の流れにそって英語のトートロジーを考察する。日英のトートロジーに共通する土台を(8)に示す。

- (8) a. トートロジーは強調表現の一種で、カテゴリーの再確認・再定義をする構文である。  
 b. 再定義は「対比するものの背景化」というプロセスを通して行われる。  
 c. トートロジーは、背景化の違いにより、内部背景化と外部背景化の2つに分類される。  
 d. 有意味化は、語彙の繰り返し、コピュラ文、表現形式等が引き金となり、背景化の種類が決まり、背景化される対比物は原則語用論的に決定される。

これをもとに英語のトートロジーを考察する。(8a)にあるように、トートロジーはカテゴリーの再確認・再定義をする構文である。そのためトートロジーにはカテゴリーを表す要素がなければならない。トートロジーは、同一名詞(主語と属詞)と繫辞しかないため、同一名詞がカテゴリーを表すことになる。もっといえば同一名詞がカテゴリーを表す総称名詞だと考えていく。

ここで総称名詞とは何かが問題になる。総称名詞が現れるのは、まず総称文であるため、総称文

の分析を援用したい。緒方 (2006b) では総称文を扱い、背景化による分析を行った。そこでは5種類の総称名詞があったとした。

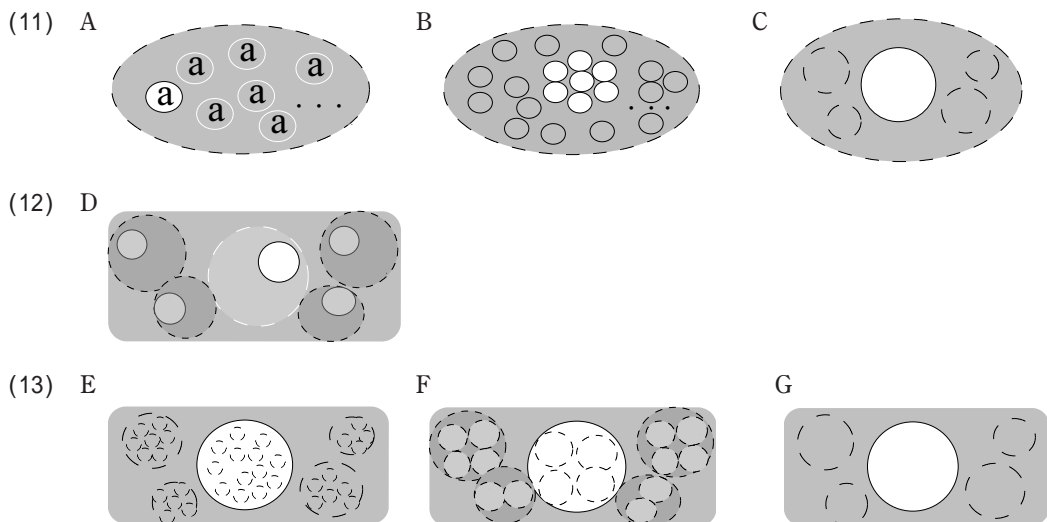
- (9) a. a(n) + Nsg(単数不定名詞句)      b. the + Nsg(単数定名詞句)  
 c.    + Nsg(単数はだか名詞句)      d.    + Npl(複数はだか名詞句)  
 e. the + Npl(複数定名詞句)

総称名詞は背景化のとり方が各々違っており、それにともない表す意味も異なってくる。背景化には3つの種類がある。内部背景化、外部背景化、限定外部背景化である。限定外部背景化は、内部背景化と外部背景化をあわせた (12D) のような構造を持つものであるが、トートロジーでは現れない (理由は4.2節)。

背景化のとり方の違いは2つある。一つは内部背景化、外部背景化、限定外部背景化のどの種類の背景化を取るかがある。二つめは各背景化の中身が違う。平たく言えばタイプ読みかトークン読みの違いがある。タイプ読みとは総称名詞がカテゴリーレベルを指す読みで、いわばカテゴリーをまとめたものとして見る。一方トークン読みとは総称名詞が個体レベルを指し、個々の成員が見えている。この2つの違いを示した表が (10) で、図示したものが (11) - (13) になる。

(10)

	内部背景化(11)	限定外部背景化(12)	外部背景化(13)
a(n) + Nsg	(11A)		
+ Npl	(11B)	(12D)	(13E)
the + Nsg		(12D)	(13G)
the + Npl	(11C)		(13F)
+ Nsg			(13G)





総称名詞はその形式に応じて、背景化の仕方が決まっている。このことを英語のトートロジーに応用する。すなわち英語のトートロジーの同一名詞は、総称名詞であり、その形式はトートロジー解釈に影響を及ぼすと考えていく。

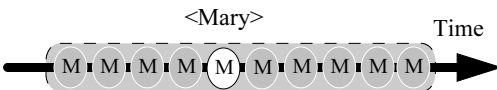
#### 4.1. 擬似カテゴリー

ここですぐ浮かぶ反例は、同一名詞に固有名詞が現れる場合である。(14)にある Madonna, イチローはカテゴリーではないという反論である。しかし本稿では緒方 (2006b) に従いこれらは擬似カテゴリーと考え、カテゴリーの一種とみなす。すなわちこれら固有名詞も、トートロジーにおいて総称名詞になると考える。以下この理由を説明したい。

- (14) a. Madonna is Madonna.                      b. イチローはイチローだ。

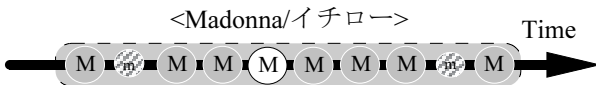
擬似カテゴリーを説明するには、まず習慣文と総称文の比較から話を始めたい。Comrie (1976: 27-28) が言うように、習慣文はその反復性 (iterativity) に関係なく、長くのびた時間に特徴的な状況 (a situation which of an extended period of time) を言及する。これは総称文と共通する特性である。習慣文と総称文の境界はあいまいで、習慣文は総称文の subclass と見なすこともできる。

具体的に見れば習慣文 (15a) の主語 Mary は、時間によって輪切りされた Mary を成員とする一つの集合体 (カテゴリー) とみなすことができる (15b)。

- (15) a. Mary drinks beer.                      b. 
- The diagram in (15b) shows a horizontal arrow labeled 'Time' pointing to the right. Above the arrow is the label '<Mary>'. Along the arrow, there is a sequence of ten circles, each containing the letter 'M'. The circles are arranged in a dashed-line container. The fifth circle from the left is highlighted with a solid black border, representing the current member of the category at that point in time.

ここで注意しなければならないのは、繰り返される [ビールを飲むという出来事] がカテゴリーの構成員ではない。そういうビールを飲むという特徴付けを持った [任意の時間の Mary] がカテゴリーの構成員になる。任意の一成員に焦点が代わる代わる当たることにより習慣の意味が生じる。いわば (11A) と同じ構造になる。

ここで (14) の固有名詞のトートロジーに話を戻そう。Madonna, イチローは完全に均質とまでいかなくとも、時系列で安定した特性を持っている。

- (16) 
- The diagram in (16) shows a horizontal arrow labeled 'Time' pointing to the right. Above the arrow is the label '<Madonna/イチロー>'. Along the arrow, there is a sequence of ten circles, each containing the letter 'M'. The circles are arranged in a dashed-line container. The first and last circles are marked with a diagonal slash (m), representing backgrounded members. The middle eight circles are solid black, representing the current members of the category.

各々時間によって輪切りされた Madonna/イチローの集合体とみさせば、カテゴリーになっている。

このとき解釈は2つある。一つは周辺の成員を背景化 (内部背景化) する解釈である。例えばイチローにヒットがないときに「イチローだめだね」と言われ (14b) を言えば、周辺の成員 ((16) の斜線円 m) を背景化し、イチロー本来の成員 (大円 M) に限定した解釈になる。カテゴリー「イチロー」は、ヒットをとばす選手だという解釈になる。もう一つは本来の成員の時に、他者を背景



化する（外部背景化）解釈である。例えばイチローがヒットを飛ばしているときに（14b）を言えば、他の選手と違ってイチローはヒットをとばすという解釈になる。

このように見れば、Madonna/イチローはそれだけではカテゴリーではないが、時系列を考えるとき、カテゴリーと同じふるまいをする。そこでトートロジーに現れる固有名詞は、擬似カテゴリーと考え、他の総称名詞と同じ扱いをする。

#### 4.2. 除外される用法

しかし総称文から除外される用法がトートロジーにはある。限定外部背景化（12D）である。まず総称文の限定外部背景化の例を示す。

(17) a. Bulgarians are good weightlifters.                      b. The Dutchman is a good sailor.

(17) ではブルガリア人/オランダ人の一部をもってカテゴリー全体を代表し、他カテゴリーと比較する。(17a) ではブルガリア人の一部 weightlifters を、他の国の weightlifters と比べており、(17b) ではオランダ人の一部 sailors を、他の国の sailors と比べている。

この限定外部背景化が成り立つためには、どの一部を比較するのかを示す要素が必要である。(17) では weightlifters, a sailor がそれにあたる。しかしトートロジーは同一語句を繫辞で結ぶだけである。カテゴリーを表す名詞はあるが、一部分を示す要素がない。そのため言語形式上、限定外部背景化は成り立たない。よって以下の議論では、これらを除外した用法で論を進めていくことにする。

#### 4.3. a(n) + Nsg

a(n) + Nsg（単数不定名詞句）では、内部背景化（11A）の解釈のみになる。図（11A）から分かるように、内部背景化なので他カテゴリーとの比較はなく、視点はあくまで一個体にある（トークン読み）。一個体ではあるが、順次すべての成員に当てはめていくため、カテゴリー全体を表すこととなる。

こうした背景化の特性上、総称名詞 a(n) + Nsg はすべての任意の成員に当てはまるか、そのカテゴリーを規定するようなものでなければならない。つまり内容は本質的なものになる（cf. Krifka, et al. 1995: 13, etc.）。

(18) a. A mother is a mother.                      b. A rule is a rule.                      c. A promise is a promise.

(18a) は母親は、本質的に母親であって全成員に共通する特性を持っていること、持つべきであることを述べている。(18bc) では規則（約束）は規則（約束）であって、規則（約束）であればすべて例外なく守らなければならないとなる。Wierzbicka (1987) が OBLIGATION の意味を持つと述べたのは、総称名詞 a(n) + Nsg のこの一面を捉えたにすぎない。しかしいつでも OBLIGATION の意味になるわけでもない。総称名詞 a(n) + Nsg が述べるのは、単にそれが本質

的内容であるということにつける。そしてなぜ本質的内容なのかという理由付けは、背景化 (11A) に起因する。

#### 4.4. + Npl

総称文であれば + Npl は (11B) (12D) (13E) の3つの背景化をとる。しかしトートロジーでは4.2節で述べた理由で、内部背景化 (11B) と外部背景化 (13E) の2つをとる。Npl は複数成員を表すというトークン読みが基本になる。(19) が内部背景化の例で、個々の違いを背景化することでダイヤモンドはダイヤモンド、豆は豆で同じであると述べている。ここには他カテゴリーとの比較はない。(20) は外部背景化の例で、言葉は言葉、説明は説明、約束は約束であってそれ以外のものではないと述べる。つまり他カテゴリーを背景化することで、カテゴリーを再定義している。

- (19) a. I asked her about quality...and her response? “I don’t care...whatever is fine...I mean *diamonds are diamonds*...”  
b. Illinois farmers like to say that “corn is corn, *beans are beans*,” regardless of new genes incorporated into seeds.
- (20) In business, *words are words; explanations are explanations, promises are promises*, but only performance is reality.

((19a)HP 資料 1, (19b)HP 資料 2, (20): Harold S. Geneen)

ここで確認したいことは、a(n) + Nsg と + Npl は同じ内部背景化であっても、その見方・捉え方が違うことである。a(n) + Nsg がすべての任意成員にあてはまる本質的なことを述べるのに対し、+ Npl はもっとゆるやかにカテゴリーを再定義する。とういのも + Npl では漠然と複数成員 (2つ~全体) に焦点をあてるからである。こうした違いも背景化 (11A) (11B) に帰すことができる。このことは総称文でのふるまいと同じである。

#### 4.5. + Nsg

+ Nsg では総称文の分析を修正する。Nsg には単数可算名詞と不可算名詞が入る。単数可算名詞の場合、外部背景化 (13G) のみの用法で従来の説明と同じになる。しかし不可算名詞の場合、内部背景化と外部背景化の両方の用法があると修正する。というのも不可算名詞の場合、不定冠詞 (a) を付けたり複数形になれない。そのため総称名詞は the + Nsg と + Nsg のどちらかの形式しか選べない。the+Nsg には内部背景化の用法がないため、不可算名詞で内部背景化の意味を表すには、+ Nsg しかないことになる。よっていわば (11B) に相当する用法を、+ Nsg があわせもつこととなる。以下2つの場合に分けて見ていく。

まず単数可算名詞の場合、(13G) のみの用法となる。冠詞がつかないため、この普通名詞はいわば抽象化している。数えられる「物」ではなく、[機能]など付随する要因に総称性を見いだす表

現になる。総称文でいえば、物として属性を述べる (21) は非文になる。

(21) a. \*Car is 20th century man's horse.      b. \*Spider has eight legs. (Allan 1980)

同様にトートロジーでも + Nsg をとる可算名詞は、「物」ではなく、付随する要因を表す。よって (22) では一回一回の war や business について述べているのではなく、戦争に付随する様々な要因 (残虐さなど)、仕事は友情といったものを排除すべき重要なものといった、[機能] のような解釈になる。

(22) a. War is War.      b. Business is Business.

次に不可算名詞を考察したい。不可算名詞も他の名詞同様、トートロジーにした場合内部背景化と外部背景化の両方の用法がある。しかし不定冠詞 (a) がつかず可算・不可算の違いがないため、形式上総称名詞は the + Nsg と + Nsg の 2 つしかない<sup>注3</sup>。総称名詞に現れる the はタイプを表すため、the + Nsg で内部背景化の意味を表すことができない。よって + Nsg で内部背景化を表すことになる。また同時に + Nsg は外部背景化の意味も表す。

可算名詞の場合 + Nsg の形式を取れば、抽象的な意味になったが、不可算名詞の場合そうしたしぼりはない。他形式がないため + Nsg にしているすぎないからである。そのため内部背景化は (11B) に似た解釈、外部背景化はもともとの (13G) の用法をとる。

(23) Wind is wind. (Fraser 1988: 219)

(24) If you cut off all thinking, you will see everything just as it is. Without thinking, water is water; ice is ice; steam is steam. No ideas hinder you. (HP 資料 3)

(23) はたこ揚げで風向きが違いうことに不平を述べる友人への発話である。風向きが違っても、風は風であって同じという内部背景化の解釈になる。(24) は水は水であってそれ以外のものではない等の外部背景化の解釈になっている。

以上 + Nsg では総称名詞が不可算名詞か可算名詞かで、その背景化のとり方が変わり、解釈も異なってくることを述べた。

#### 4.6. the + Npl

Chesterman (1991: 36) は the + Npl の意味を types, subspecies of a genus であり more-than-one species とする。つまり the + Npl は、各成員の集まりではなく、下位カテゴリーの集合体になる。つまり the (タイプ) + Npl (サブタイプ) となる。総称文と同じく (11C) (13F) の 2 用法がある。(25) はオリンピック競技の話になる。オリンピックの試合を純粹に競技だけに再確認・再定義をしようとしている。このとき他カテゴリーとの比較はなく内部背景化になる。試合はオリンピックであるので様々な競技が含まれる。一方 (26) は外部背景化の例になる。武器は武器であって、

他カテゴリーのものではないと述べている。この場合も武器には色々な種類があるため the + Npl の形式を取っていると考えられる。

(25) The former world champion distance runner said it saddened him that the event had turned into an entertainment juggernaut overseen by too many officials. “*The games are the games, the contests themselves...*” (HP 資料 4)

(26) The weapons are the weapons.

しかし実際には、the + Npl の形式をとるトートロジーには (13E) の用法になるものもある。つまり the (タイプ) + Npl (トークン) の解釈で、総称名詞 the + Npl は個性を持った複数成員の集まりと見なされている。例を (27) に示す。(27) は外部背景化の例で、原作は原作、映画は映画と述べているにすぎない。そこには本のサブグループ、映画のサブグループがあるようには感じられない。

(27) But she insists the books are the books, and the films are the films. (HP 資料 5)

これはむしろ通例の用法とは異なる。なぜなら総称文の the はタイプを表すため、Npl はサブタイプを示すのが標準的だからである。しかしサブタイプの数限りなく増えたものが、(13E) とも考えられるので、(13F) と連続しているとも考えられる。

この the + Npl 形式のトートロジーを取り上げている研究は調べた文献にはなかった。用例も少なく周辺のトートロジーと考えられる。しかしトートロジーがカテゴリーの再定義構文であって、同一名詞は総称名詞であるという立場をとるとき、the + Npl 形式のトートロジーは存在するし、説明しなければならないと考える。

#### 4.7. the + Nsg

the + Nsg は総称文であれば外部背景化 (13G) と限定外部背景化 (12D) があるが、トートロジーでは (12D) は排除されるため (13G) の用法のみになる。図 (13G) から分かるように、ここではカテゴリーは単一なもので、中の構成員は見えてこない。純粋にカテゴリーについて述べる。つまり構成員の差異はなく、すべてが同じふるまい/特性を持つものとしてみなされている。定冠詞 the はタイプを表し、the + Nsg はタイプ読みになっているからである。

(28) The law is the law.

そのため (28) では個々の法律は見えておらず、法律というカテゴリー全体について述べている。つまり the + Nsg では、個々の成員を無視してカテゴリー全体にあてはまる内容について述べるトートロジーになる。ただし内容の本質の度合いは、a(n) + Nsg (単数不定名詞句) が上である。

## 5. トートロジー的表現

恒真ではあるが、[ X is X ] の形式を取らない表現をトートロジー的表現と考える。英語には (29) のようなトートロジー的表現がある (Ward and Hirschberg 1991)。いずれも恒真で、伝える情報がないかに見える。しかしこれらもまた同一語を繰り返す強調表現の一種であり、トートロジーと同じ背景化のプロセスが働いている。

- (29) a. Disjunctions: (either)  $p$  or not  $p$   
 b. Conditionals: if  $p$  (then)  $p$   
 c. Subordinate conjunctions: when  $p$ ,  $p$ ;  $p$  because  $p$ ;  $p$  where  $p$   
 d. Headless relatives: what  $p$ ,  $p$ ; whatever  $p$ ,  $p$

この場合内部背景化と外部背景化の両方がある。ここで注意しなければならないのはトートロジー的表現はトートロジーと違い、カテゴリーの再定義/再確認をする構文ではない。強調構文の一種にすぎない (cf. 緒方 2006a)。そのため (29) の繰り返し部分  $p$  は、必ずしもカテゴリーにならない。様々な表現が現れる。次節より表現別に見ていく ((30) - (40) で引用を明記していない例文はすべて Ward and Hirschberg 1991.<sup>注4)</sup>。

### 5.1. Disjunctions

まず選言表現 (29a) の場合、内部背景化が2種類 ((30) (31))、外部背景化が1種類 ((32)) ある。各々背景化を図示したものが、(33) である。内部背景化 ((33a, b)) のときは、カテゴリー (境界線) の再定義・再確認が行われる。

- (30) a. You're either a member of OPEC or not.  
 b. "Host: Either a ham has a bone or it doesn't have a bone. Where'd they get a name like 'semi-boneless' from?"
- (31) You either agree or you don't.
- (32) Either John will come or he won't come. (Levinson 1983: 111)

- (33) a. 中間成員の背景化      b. 周辺成員の背景化      c. 外部要因の背景化



内部背景化 (30) (図:(33a)) は、中間成員を背景化する。本来二者択一的なものを、あいまいになりかけたとき、再度二者択一であると確認する。(30a) では OPEC の成員かどうかには、中間

的（周地的）なものがないことを確認している。(30b)でもハムは骨付きかボンレスであって、中間的な semi-boneless はありえないと述べている。次に内部背景化 (31) (図:(33b)) は、程度差をとまなう場合で、周辺成員を背景化し、プロトタイプしかないことを述べる。(31)では全面的に賛成か反対かであって、部分的/条件的（周地的）な賛成はないと述べる。最後に外部背景化 (32) (図:(33c)) は、周辺成員も程度差もない場合、外的要因を背景化し、A/¬A 以外の外的要因が何ら関係ないことを述べる。(32)の「来るか来ないか」には中間的なものもなければ程度差もない。二者択一である。内部に背景化するものがないければ、当然外部を背景化することになる。外部とは外的要因のことである。彼が来たら、あるいは来なければ、こうなるああなるという付随することは「来ること/来ないこと」には全く関係がなく考える必要がないことを述べている。トートロジー的表現もまた、トートロジーと同じように背景化のプロセスが働いている。そう考えるとき、3つの意味の違いを容易に説明することができる。

## 5.2. Conditionals

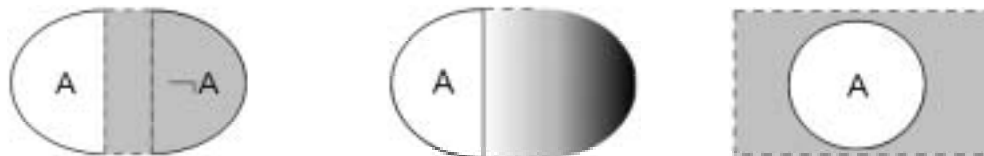
条件文 (29b) の場合も、内部背景化が2つ、外部背景化が1つある。ただし表現が違うため、図示した背景化 (37) は選言表現とは異なる。ここでも内部背景化 ((37a, b)) のとき、カテゴリー（境界線）の再定義・再確認が行われる。

(34) a. If you've got it you've got it.  
 b. If you have freckles you have freckles. (a,b: Wierzbicka 1991:438)

(35) a. If it's crowded, it's crowded.  
 b. If you don't know the language, you don't know the language.  
 c. If he does it, he does it. (Levinson 1983:111)

(36) If I miss, I miss.

(37) a. 中間/対立成員の背景化      b. 周辺成員の背景化      c. 外部要因の背景化



内部背景化 (34) (図:(37a)) は中間及び対立成員（反対成員）を背景化する。本来はAか¬Aと二者択一的なものに、中間的成員によって境界が揺れた場合、この表現でAか¬Aしかないとし、A以外を背景化する。(34)で言えば、手に入れたか入れないか/そばかすがあるかないかは、もともと二者択一的である。その境界がゆれそうになったとき、この表現を用い、Aか¬Aしかないとし、Aは¬Aでないことを強調する。

内部背景化 (35) (図:(37b)) は、A以外の周地的成員を背景化する。(35a)では混雑していた



ので、別の入り口に行こうとしたときに発せられた発話である。どの入り口に行こうとも同じように混雑していると述べている。つまり混雑しているのであれば、どの入り口に行っても混雑の度合いが低いもの（周縁的成員）はないと言っている。(35b) では、ことばを知っているかどうかは本来程度差がある。しかしこの表現をとることで、程度差を消している。知らないのであれば、100%知らない、周縁成員をすべて背景化している。(35c) では、やるのであれば徹底してやると、周縁的な「やる」(手を抜いた中途半端な やる ) をすべて背景化している。

最後に外部背景化 (36) (図:(37c)) は、外的要因を背景化し、A 以外の外的要因が何ら関係ないことを述べる。(36) は何度もフィールドゴールをしたが決められなかった時の発話である。失敗したのであれば、結局何度ゴールをしたか関係ないと述べている。失敗以外の要因を背景化している。

以上見たように、背景化の仕方は選言表現と若干違いがある。しかし内部背景化2つと外部背景化が1つあること、そして内部背景化においては再定義/再確認が行われるという本質部分は同じである。

### 5.3. Subordinate conjunctions and Headless relatives

従属接続詞 (29c), 主要部欠如型関係詞節 (29d) は、前節条件文と同じなのでまとめて見ていきたい。すなわち内部背景化が2つ、外部背景化が1つあり、内部背景化 ((37a, b)) のときカテゴリー (境界線) の再定義・再確認が行われる。

(38) But when they're gone, they're gone.

(39) It's not bad because it's not bad.

(40) a. It means what it means.                      b. It says what it says.

内部背景化 (38) (図:(37a)) は中間及び対立成員 (反対成員) を背景化する。本来二者択一的なものの境界線が揺れた場合、この表現で A か¬A しかないと二分し、A 以外を背景化する。(38) ではなくなったものは、なくなっており、中途半端なくなりなどなく、もう存在しないことを強調している。内部背景化 (39) (図:(37b)) は、A 以外の周縁成員を背景化する。(39) では単に悪くない状態に過ぎず、とても良いわけでも、とても悪いわけでもないことを述べている。not bad 以外の成員を背景化している。外部背景化 (40) (図:(37c)) は、他の外部要因をすべて背景化する。(40a) では意味するもの、(40b) では書いてあること、それ以外は何ら関わらないし、考慮する必要がないことを述べている。従属接続詞、主要部欠如型関係詞節をとるトートロジー的表現も、同じく背景化のプロセスによって説明することができる。

### 5.4. 日本語のトートロジー的表現

緒方 (2006a) で日本語のトートロジー的表現 (41) を考察した。そこでの結論は、「すべてに共



通して「周辺の X を背景化する」という、内部背景化のプロセスが起こる」とした。つまり内部背景化 1 種類しかないと主張した ((41) のリストは瀬戸 1997: 64-65)。

- (41) a. 「A か A でないか(のどちらか)」(彼は来るかも知れないし来ないかも知れない)  
b. 「A ならば A」(負けたのなら負けたのだ)      d. 「A だから A」(好きだから好き)  
c. 「A のときは A」(やるときはやる)              e. 「A なものは A」(いいものはいい)

しかし前節までの考察を踏まえれば、修正が必要なことは明白である。(41) の表現は、英語のトートロジー的表現と平行関係にあり、そのまま置き換えられる。すなわち (41a) は選言表現 (5.1 節, 図(33)) と同じ背景化を行い, (41b-e) は他のトートロジー的表現 (5.2, 5.3 節, 図(37)) と同じ背景化を行うと修正する。各々の背景化に対応する例は、英語のトートロジー的表現をそのまま和訳したもので代用できると考え省略する。

## 6. まとめ

本稿では英語のトートロジー、トートロジー的表現を中心に考察した。そこでの結論は英語のトートロジーもまた、日本語と同じく強調表現の一種でカテゴリーの再確認・再定義をする構文ということであった。ただし日本語と違い総称名詞の種類が、トートロジー解釈に強く影響を与えていることを示してきた。またトートロジー的表現も、緒方 (2006a) よりも細かく分類し意味の成り立ちを分析した。

### 注

- 注 1. むろん大人以外を対比することもできるが、その場合は文脈をしっかりと整える必要がある。  
注 2. トートロジーに「らしさ」があるとすれば、文脈依存度が低いほどトートロジーらしさがあり、文脈依存度が高いほどトートロジーらしさはないと言える。  
注 3. Krifka (2001) が述べるように the + Nsg より + Nsg が使われる傾向がある。  
(i) a. Milk contains a lot of calcium.  
b. ?The milk contains a lot of calcium.  
注 4. Ward and Hirschberg 1991. では文脈付きで各例文が提示されているが、本稿では省略してある。

### 参考文献

- Allan, K. 1980. "Nouns and Countability," *Language*, Vol. 56, No. 3, 541-567  
Bulhof, J. & S. Gimbel 2001. "Deep tautologies," *Pragmatics & Cognition* 9-2: 279-291.  
Bulhof, J. & S. Gimbel 2004. "A tautology is a tautology (or is it?)," *Journal of pragmatics* 36: 1003-1005.  
Carlson, G. and F. Pelletier eds. 1995. *The Generic Book*. University of Chicago Press.  
Chesterman, A. 1991. *On Definiteness: A study with special reference to English and Finnish*. Cambridge

- University Press.
- Comrie, B. 1976. *Aspect: An Introduction to the Study of Verbal Aspect and Related Problems*. Cambridge University Press.
- Fraser, B. 1988. "Motor oil is motor oil: An account of English nominal tautologies," *Journal of Pragmatics* 12: 215-220.
- Gibbs, R.W., & McCarrell, N.S. 1990. "Why boys will be boys and girls: Understanding colloquial tautologies," *Journal of Psycholinguistic Research*, 19: 125-145.
- Grice, H. Paul. 1975. "Logic and conversation," Cole, P., and J.L. Morgan, eds. *Speech Acts*. New York: Academic Press: 41-58.
- Krifka, M. 2001. "Kinds of Kind Reference," Talk held at the Workshop on genericity. University of Cologne.
- Krifka, M., F. J. Pelletier, G. Carlson, A. ter Meulen, G. Chierchia & G. Link 1995. "Genericity: an introduction," G. Carlson and F. Pelletier eds. 224-237.
- Levinson, Stephen C. 1983. *Pragmatics*. Cambridge Univ. Press.
- 緒方隆文. 2006a. 「トートロジー 背景化による強調」『筑紫女学園大学・筑紫女学園大学短期大学部紀要』第1号. 31-47.
- 緒方隆文. 2006b. 「総称文とカテゴリー」『論叢』第17号. 39-55. 筑紫女学園大学・筑紫女学園大学短期大学部国際文化研究所.
- Okamoto, Shigeo. 1993. "Nominal Repetitive Constructions in Japanese: The 'Tautology' Controversy Revisited," *Journal of Pragmatics* 20: 433-466.
- 瀬戸賢一. 1997. 『認識のトレリック』海鳴社.
- 坂原茂. 2002. 「トートロジーとカテゴリー化のダイナミズム」大堀寿夫(編)『認知言語学 : カテゴリー化』東京大学出版会.
- Ward, Gregory and Julia Hirschberg. 1991. "A Pragmatic Analysis of Tautological Utterances," *Journal of Pragmatics* 15: 393-406.
- Wierzbicka, Anna. 1987. "Boys will be boys: 'Radical semantics' vs. 'Radical pragmatics'," *Language* 63 (1): 95-114.
- Wierzbicka, Anna. 1991. *Cross-Cultural Pragmatics: The Semantics of Human Interaction (Trends in Linguistics : Studies and Monographs 53)*. Walter De Gruyter Inc.

#### HP 資料 (閲覧引用は 10/19/2006)

- 1 . <http://www.diamondring.com/forums/showthread.php?t=52724>
- 2 . <http://www.lib.niu.edu/ipo/1998/ii981116.html>
- 3 . <http://www.kwanumzen.com/pzc/oldnewsletter/v09n07-1981-july-dssn-greatworkoflifeanddeath.html>
- 4 . <http://www.tribuneindia.com/2000/20000814/sports.htm>
- 5 . <http://www.telegraph.co.uk/arts/main.jhtml?xml=/arts/2005/10/28/bfpotter28.xml>